

Problem Solving

# Case 4



都筑冒険あそび場

## まんまるプレイパーク

都筑区

課題1 | 担い手の確保と対応

課題2 | 広報周知

課題3 | ニーズ把握

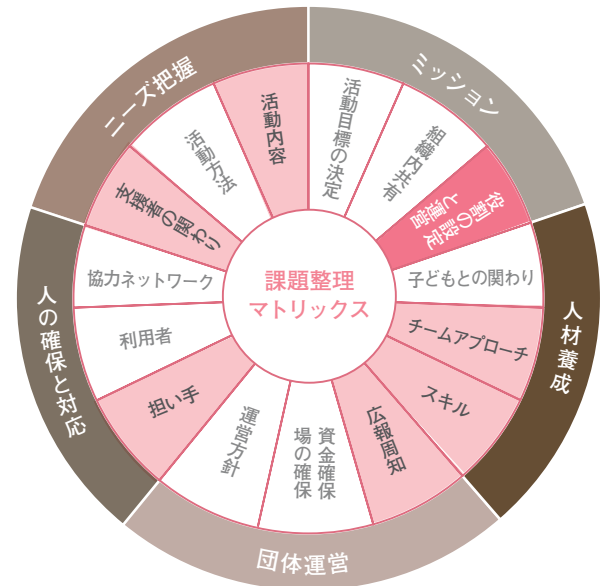
課題4 | 人材養成

課題5 | 役割の設定と運営

まんまるプレイパーク 子どもが夢中で遊べる場所を



鴨池公園まんまる広場周辺は港北ニュータウンの中央に位置し、住民の出入りが多い地域です。特に遊具などがあるわけではありませんが、日当たりのよい、緑に囲まれた広い空間は、新しく越してきた親子も気楽にふらっと立ち寄れる雰囲気があります。この公園の広場で、誰でも参加できる、自由な遊び場、まんまるプレイパークが開催されています。



活動のきっかけ

子育てサークルの仲間と「もっと自由な遊び場があったら、自分たちの子どもがもっとのびのび育つよね」と考えるようになり、どこかにそういう場所はないかとリサーチしたところ、「世田谷プレイパーク」を見つけました。早速見学したところ、子どもがのびのびと育つ場として、プレイパークへの関心が高まり、自分の住んでいる都筑区でもプレイパークを創りたいという思いが膨らんでいきました。

そのような時、横浜でプレイパークをつくらうネットワーク（現在のNPO法人YPCネットワーク\*1）があることを知りました。YPCネットワークの方々との出会いによって、プレイパーク立ち上げについての様々な相談をすることができるようになり、知恵と

この方にお聞きました

PROFILE

山崎 佳之さん (40歳)

プレイリーダー。ニックネームは「はんす」。もともとは役者志望で子ども向けの芝居もやっていたが、子どもの勉強をしたいと思い、いろいろな講座を受講する中で、たまたま、まんまるプレイパークと出会い、それを機に活動を始める。プレイパークでは、大きい子どもが小さい子どもの面倒を自然に見ている関係性や環境があることに感激して、「もし結婚して子どもができて、ここなら元気に子育てして生きていける」と感じ、10年間まんまるプレイパークで活動を続けている。



山崎 雅美さん (40歳)

プレイリーダー。ニックネームは「まさみっちょ」。保育士としての経験をもつ。夫の「はんす」とはこのプレイパークで出会い結婚。結婚式もこの公園で挙げた。公園そばの住まいで暮らしながら、ふたりのお子さん（2歳・4歳）もプレイパークで週の大半を過ごしている。「大人に遠慮しないで、思いっきり遊んで欲しい」という思いを大事にしながら、プレイパークでの活動を続けて13年になる。



西田 清美さん (54歳)

独身時代に実家大阪で 冒険あそび場の立ち上げを手伝ったことから「子育ては、こういう場所をしたい」という強い思いを持った。世田谷プレイパークを見学し、関心を深め、緑区の三保ねんじゅ坂プレイパークに世話人として参加。自分たちのまちにも是非プレイパークを作りたいと、様々な団体、関係機関の協力を得て、約3年をかけて、2005年12月まんまるプレイパークを開設。代表を務める。2019年、大阪への転居に伴い、代表を交代。



実施場所	鴨池公園まんまる広場（都筑区荏田3丁目）
活動日	毎週月曜日・火曜日 11:00～17:00 毎月第2・4日曜日 11:00～17:00 毎月第4金曜日 14:00～17:00
URL	http://manmarupp.ciao.jp/
開設年月日	2005年12月
利用者数	およそ100人（イベント300人）

利用料	無料
活動内容	<input type="checkbox"/> プレイパークの運営 <input type="checkbox"/> 不定期イベントの開催 ・青空フェスタ ・おそとで紙芝居 ・青空ヨガ ・絵の具あそび など

力を借りて準備を進めていきました。

立ち上げには、プレイパークを創ることに共感して協力してくれるメンバーが必要でしたが、当時、子育て中のママたちの講座を企画した仲間、まんまる広場で一緒に活動していた子育てサークルの仲間、都筑区の子育てフェスタ「子どもの遊び場について考えよう」に集った人たちなど、子どもや子育てに関心がある人、今、子育てをしている人などに声をかけ、メンバーになってもらうことができました。

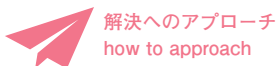
更に、都筑区の助成金を受けて連続講座を開催し、プレイパークに協力してくれる仲間を集め、自分の子どもの通う小学校のPTA会長、地域の自治会の方、鴨池公園愛護会（当初は、愛護会の中の一部の人や知り合い）の協力も仰ぎながら、まんまるプレイパークを立ち上げることができました。

#### 活動の目的

- 1) 「あれはダメ」「こうしなければならない」などの禁止事項や決まり事が極力ない、「子どもの自由な遊び場」づくり
- 2) 子どもひとり一人の個性が発揮できる場づくり「そのままで大丈夫」というメッセージを常に発信
- 3) 頑張らない子育てを親たちと共にする場づくり
- 4) 誰もがその人らしくいられる地域づくり

## 課題1 担い手の確保と対応

### I プレイパークの中心的キーパーソンの確保



#### 継続的にプレイパークを運営するプレイリーダーと世話人

#### 具 体 策

##### ① 同じプレイリーダーが継続的に活動することでの安心感

プレイリーダーは遊びのスペシャリストで、プレイリーダーが運動の機会を作りだし、魅力的な遊びを考えることによって、子どもが自然と遊びに入るようになります。また、子どもが遊びを楽しむには、プレイリーダーも本気になって子どもと遊び、子どもと一緒に自身も思い切り楽しむことで、子どもとの信頼

関係を深めていきます。子どもは、遊びを通して、友達を思いやる心や社会のルールなど、様々なことを学んでいきます。プレイリーダーは子どもの成長を健やかに促し、楽しませる役割を担う仕事であり、その存在はとても重要です。

「まんまるプレイパーク」では、活動日はプレイリーダー2名と世話人（ボランティア）1名以上で活動しています。プレイリーダーはYPCが雇用し、市内の各プレイパークに派遣されるという形態をとっていますが、まんまるでは主に山崎夫妻がプレイリーダーとして活動しています。そのため常にプレイパークや参加する子どもの様子に気を配ることができ、世話人との関係も継続していて、みんなが安心して活動に参加できるプレイパークになっています。

##### ② 子どもの成長と共に保護者が「世話人」に

プレイリーダーは仕事として活動していますが、世話人は市民が行うボランティア活動です。世話人は常時30名程度いますが、入れ替わりはあります。直接応募してくれることもあります。子どもが小さい時、利用者として参加していた母親が、一緒に遊んでいた子どもたちのことが気になり、子どもが大きくなったのを機に世話人として活動に参加するケースもあります。そのため活動時間は個人の状況に合わせて柔軟に設定し、午前中だけ、幼稚園のお迎えまでなど本人の都合に合わせて対応しています。

参加の保護者の様子を観て「この人はプレイパークが好きだな、世話人になってくれるかな」と思う人にはプレイリーダーが声をかけて協力をお願いすることもあります。

##### ※1 NPO法人YPCネットワーク

市民と横浜市が連携して、子ども達の「やりたい」という気持ちや発想を大切にし、自由にのびのびと子ども時代を過ごせる遊び場（＝プレイパーク）を、子どもの生活圏に創る活動を行っている。

##### ※2 プレイリーダー

子ども達が遊び場で生き生きと遊ぶことを補助し、そのための環境を作る人のこと。事故などが起きないように、安全に配慮した遊び場創りをするのもプレイリーダーの役割。子どもに合わせて柔軟に動き、手作りのおもちゃ制作や運動遊び、屋外での冒険遊びなど、子どもが遊びを通して成長できるよう促す。



## 課題2 | 広報周知

### I プレイパークの認知度が低い



#### 地域とつながってプレイパークが認知され発展する

まだまだ、プレイパークを知らない人が多く、知ってもらおうためのアプローチが必要です。「知らない」にも種類があります。

- 1) プレイパークが何をするとところか知らない
- 2) 地域の公園にプレイパークがあることを知らない
- 3) 利用対象者やプログラム、イベント情報を知らない
- 4) 誰が運営しているのか知らない

それぞれの「知らない」を解消できたら、もっと地域の子どもたちが元気よく遊ぶことができ、保護者同士、また、保護者とプレイパークのスタッフたちとのつながりも生まれて、子育ての不安や心配が軽減できるかもしれません。

「まんまるプレイパーク」に来る親子の中には、引っ越してきて間もなく知り合いもない、子どもを遊ばせる機会もなく地域の情報をあれこれ調べて、ようやくプレイパークをみつけたという人がいます。もっと、プレイパークの情報を入手しやすいよう工夫する必要があると思っています。

#### 具 体 策

##### ①都筑区の子育て支援拠点「ポポラ」とのつながり

プレイパークのイベント開催協力を得て、参加者にプレイパーク情報を発信し、チラシやパンフレットを配架しています。

##### ②地域の小学校とのつながり

プレイパークのチラシを10年にわたり継続的に配布してもらっています。

##### ③地縁役員・公園愛護会の理解と協働

地元の地域との関係性を少しずつ深めていく中、自治会町内会等の地縁役員や公園愛護会の理解が得られ、公園に物置を設置しプレイパークの備品を置かせて頂いたり、プレイパークの活動をするにあたり、公園内で火を使うことができるようになりました。

こうした理解と協力の広がりや、プレイパークの活動がしやすくなったり、子どもたちにとって、必要な経験をするための活動ができるようになるなど、プレイパークの活動を発展させます。プレイパークは地域と共にあって、地域に育てられていると思っています。

#### ④小学校や保育園がプレイパークを活用

小学校、保育園、学童保育所など地域の子どもたちの関係機関が、プレイパークを知り、プレイパークとともに、子どもたちにとって効果的な遊びの場としていくことで、プレイパークは、その存在意義を高めていくことができます。

例えば、近隣小学校の総合学習の授業の一環で、子どもたちが先生の引率でプレイパークを利用したことがあります。子どもたちは、プレイパークの場で、自由な発想で様々な遊びを考え、体と心を存分に働かせました。そして、これを機会に数名の小学生が、一人でもプレイパークに来て遊ぶようになりました。また、プレイパークで火を使用していることを知った地域の保育園から、焼き芋ができないかと相談がありました。園児たちが保育士さんと一緒にプレイパークで思い切り遊んでいる間に、高齢の男性世話人や子育て中の世話人が、焚火を準備。ホカホカの焼き芋が出来上がり、みんな大喜びでした。近隣の学童保育所の子どもたちは、プレイパークによく遊びにやってきます。学童保育の子どもは定期的に利用しているので、プレイリーダーも顔見知りで、子どもたちからニックネームで呼ばれています。

## 課題3 | ニーズの把握

### I 様々な子どもへの関わり方



#### 誰でも気軽に自由に居ることができる場

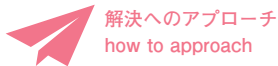
「まんまるプレイパーク」には、気が付くと、家庭に難しい課題のある子や、学校に行っていない子、同じ仲間と同じことをするところではなじめない子どもが集まってきます。彼らが、若者になって子ども時代を振り返るとき、「プレイパークが当時の自分にとって救われた場、唯一自分で行くことができた場だった」と気づくことがあると聞きます。

プレイパークの担い手は、不登校の子どもに対する専門知識を持った者はいません。しかし、子どもたち、一人ひとりの抱える課題には、プレイパークにいるスタッフ皆が、長い時間をかけて理解に努め、癒し合い、支え合います。だからこそ、成長の



過程の中の様々な状況の中でも、子どもたちの拠り所になり続けていると感じています。誰でも自由に来ることができる屋外の居場所は、とても重要だと思っています。

## Ⅱ 子ども本位の居場所づくり



### 子どもの主体性を育てる

子どもの育ちや自立を阻む要因について考えるとき、子どもを育てる環境が、大人が管理しやすい場や機会ばかりになっていると思います。大人が責任を負うような状況になることは極力避ける、こんな社会の中では「子どものやりたいこと」は尊重されない。やりたいことがあっても、大人側の事情でできなくなる。子ども自身も、大人の考え方に合わせるようになり、自分の意見を発信しなくなる。大人がつくる子どもの居場所は、大人目から見て「役に立つもの・誰が見ても良いと思うもの」であり、本来、子ども自身が求める、自分が「面白い」とか、誰にもわからないかもしれないけれど「自分にとっては大切」とか、そういうものでなければ、子どもの拠り所となる居場所にはならないと思います。

そういう意味で「まんまるプレイパーク」は子ども本位の、子どもの居たい場所にしたいと思っています。

### 親にとっての居場所も必要 多様な交流が人を支える

子育ての不安や大変さを抱えて、まんまるに来て仲間になる親子がいます。わが子だけを見ていると煮詰まってしまうけれど、ここでは皆で、すべての子どもを見守る。自分の子どもだけではなく、他の子どもも見守る中で、学ぶことも多く救われるのだと思います。

特別な枠組みもなく出入りも自由、学区の違う小学生、中学生など、出会わなかったかもしれない子どもたちが出会って、本当に仲良くなる場所。本当に気の合う友達、同じ学校、同じ学年とは限りません。ここでは年齢・性別も超えて仲良くなり、本当の家族のような関係性が出来る。そこが良さだと思います。

## 課題4 | 人材養成

### I スキル・チームアプローチ・価値観の共有



#### 定期的なプレイリーダー・世話人研修

#### 具体策

##### ① 月1回、研修日を設けて

プレイリーダーの派遣元である YPC では月1回研修を実施

しています。講師は他自治体で活動するベテランプレイリーダーや専門家などです。プレイリーダーとしての悩みや迷いについてスーパーバイズしてもらったり、具体的なスキルについて学んだりしています。世話人は、月に一度、半日の活動日に、プレイリーダーから具体的な遊び方やロープワーク、リスクとハザードなどについて学ぶ機会を設けています。その際に気になる子どものようすなどを話し合う時間も作っています。

##### ② 気持ちを一つに、まんまるを育てようとする意識

プレイリーダーである山崎夫婦は、まんまるプレイパークに関わり続けたいと公園の隣に引っ越しました。まんまるプレイパークとの関わるきっかけは、プレイリーダー、世話人共に様々かもしれません。でも「まんまるが大事」という気持ちは皆で大切にしたいと思っています。

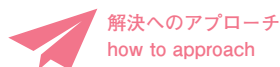
子どもたちの育つ環境は、変化し続けています。子どもたちにとって、遊びや仲間は、いつの社会でも必要なものだけれど、変化する社会の中で、まんまるがどんな遊びの機会を子どもたちに提供するの、また、どのように子どもとの関係を築いていくのかは、まんまるチーム皆で語り合う必要があります。

一人の小さな想いや考えを言葉にして共有することで、課題解決の道が拓けたり、新しい取り組みの発想も湧くと思っています。

##### ③ 皆が意見を出しやすくするためのファシリテート

まんまるが大事だから、想いがあるから、時には意見がぶつかることもあります。言いにくいことを発言しなければならないこともあります。大切な皆の意見が出しやすいように、こうした機会には、外部から皆の意見がスムーズに出せるよう、また、皆からどんな意見が出されたのか客観的にまとめるファシリテーター役の方をお願いすることもあります。

## Ⅱ 新たなまんまるの在り方を探る



### プレイパークが子どもに資するものであるために

居場所同士の繋がり、地域の様々な方とのつながりが大切と思います。“子どものことは子どもから学ぶ”姿勢が大切だと思



います。少子化が加速していて、大人が意識しないと、子ども一人の周りに大人が何人も囲むことになっていきます。常に大人の管理の下で子どもは生活し、自分でものを考え、判断して、生活するという経験を失っていきます。

家庭や学校だけではなく、地域で、どう子どもを見守り育てるのか、様々な居場所や子どもを想う人々が繋がる必要があり、それを共有していかなければと思っています。

## 課題5 役割の設定と運営

### I 組織が継続していくための見直し



「まんまるプレイパーク」立ち上げから13年目。設立当初から代表を務めていた西田さんの大阪への引っ越しが決まり、代表交代が必要になりました。新代表を決めるにあたり、代表の仕事とはどんなことなのか、共通理解ができていないことに気づきました。また、どのように新代表を選出すべきか考える必要があることにも気づきました。

#### 具 体 策

##### ① 代表の仕事とは何かを世話人で共有

プレイパーク開催の申請提出書類作成／プレイパークネットワークの代表者会出席／毎月の報告書提出／毎月の定例会開催／必要な研修や助成金申請／地域や区との連携、会議への出席／近隣の小中学校へのあいさつ、広報／そのほか団体との連携／イベントの開催、協賛など／SNS、ブログ、ホームページ作成

##### ② 新旧交代までのプロセス

代表の仕事を書面化する→プレイパークの仕組みを印刷し、世話人等に配布、説明→プレイリーダーと旧代表がファシリテーターになり、新旧の世話人が語り合う場を開催→代表を決めるための話し合いを数回に渡り開催→自分ができること、できないことを出し合い、分担等を決定

##### ③ 新たな代表の決定

話し合いの結果、世話人の佐々木さんが「次の代表が決まるまでの任期であれば引き受ける」「みんなの支えが必要」との条件つきで引き受けてくれました。

そこで、新代表をサポートする形で、書類の作成、ITを活用した広報の実施など、数名の世話人さんで分担しました。また、地域関係団体などとの連携には、それぞれの世話人が住んでいる地域や子どもの通う学校などを担当。研修の企画実施などは、経験豊富な世話人が中心となり実施することとしました。SNSの活用などについては、新しい人材も加わり協力してくれることとなり、より充実させることができる結果となりました。

#### 取材を終えて

「居場所」というと、多くの人が、屋内の空間を想像するでしょう。「まんまるプレイパーク」はもちろん、プレイパークは、地域の子もたちにとって、まぎれもない「居場所」です。仕切りもない空間は自由に入りでき、遊びの達人のプレイリーダーや世話人と共に、様々な年齢の子もたちが主体的に遊ぶ場は、ワクワクする面白さがあり、心が動きます。

昭和の時代には、こうした、雑木林や空き地などがそこかしこにあって、当たり前、異年齢の子もたち同士で、日が暮れるまで遊んでいました。時にはケガやケンカもあったでしょう。でもその中で、子どもたちは育ちました。自ら安全を守ることや仲間を大切にすることも学んだでしょう。プレイパークは、現代社会で、そうした子どもの育つ場を取り戻そうとしている社会資源だと思います。人工的なものを極力省いた自然空間で、人を育て、地域を育てています。

横浜市には、NPO法人 YPC ネットワークがあり、市民と行政が連携して、自由にのびのびと子ども時代を過ごせる遊び場「プレイパーク」を生活圏に創る活動を行っています。これからも、子どもたちを心身ともに健康に育てるために、地域の中で、子どもを育て、プレイパークも育てていく取り組みが活発に行われることに大きな期待を持ちました。

